

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごのにようぼうごしよ

四糸金吾女房御書

新版
1510
ゝ
1511

しじようきんごのにようぼうごしよ

四条金吾女房御書

ぶんえい ねん ぶん 8 年 ('71) 5 月 50 歳 さい にちげんによ

文永 8 年 ('71) 5 月 50 歳 日眼女

かいたい 由 うけたまわ そうら お 懐胎のよし 承り候い畢わんぬ。それについては符の ふ

こと仰せ候。日蓮、相承の中より撰み出だして候。能

おお そうろう にちれん そうじよう なか えら い そうろう よ

く能く信心あるべく候。たとえば、秘薬なりとも、毒を入

よ しんじん そうろう ひやく どく い

れぬれば薬の用すくなし。つるぎなれども、わるびれたる

くすり よう 剣 悪 怯

人のためには何かせん。なかんずく夫婦共に法華の持者なり。

ひと なに ふうふとも ほつけ じしゃ

ほけきようる ふ 種 継 たま こい う

法華経流布あるべきたねをつぐところの玉の子出で生まれ

ん。めでたく覚え候ぞ。色心二法をつぐ人なり。いかでか

おほ そうろう しきしんにほう ひと

め

遅

そうろう

疾

生

そうら

おそなわり 候 べき。とくとかそうまれ 候 わんずれ。こ

くすり

飲

たま

うたが

の 薬をのませ給わば、 疑いなかるべきなり。

やみ

ともしびい

あき

じよくすい

つきい

闇なれども 灯 入りぬれば明らかなり。 濁水にも月入り

澄

あき

にちがつ

過

きよ

ぬればすめり。明らかなること、日月にすぎんや。 浄きこと、

れんげ

ほけきよう

にちがつ

れんげ

ゆえ

蓮華にまさるべきや。 法華経は日月と蓮華となり。 故に

みようほうれんげきよう

な

にちれん

にちがつ

れんげ

妙法蓮華経と名づく。 日蓮また日月と蓮華とのごとくなり。

しんじん

みず

りしよう

つき

かなら

おう

た

しゅご

たも

信心の水すまば、 利生の月、 必ず応を垂れ、 守護し給うべ

疾

生

そうろう

ほけきよう

い

し。とくとかうまれ 候 べし。 法華経に云わく「かくのごと

みようほう

い

あんらく

ふくし

う

うんぬん

き妙法」。また云わく「安楽にして福子を産まん」云々。

くでんそうじよう

べんいろう

もう

含

口伝相承のことは、この弁公にくわしく申しふくめて

そうろう すなわ によらい つか

かえ がえ しんじんそうろう

候。則ち如来の使いなるべし。返す返すも信心候べし。

てんしやうだいじん

たま

素

幾

鳴

尊

授

たま

天照太神は、玉をそさのおのみことにさずけて、玉のご

みこ

儲

ひ

かみ

わ

こ

名

とくの子をもうけたり。しかるあいだ、日の神、我が子とな

まさかあかつ

な

にちれん

づけたり。さてこそ正哉吾勝とは名づけたれ。日蓮、うま

たね

そうら

わ

こ

劣

るべき種をさずけて候えば、いかでか我が子におとるべき。

ひと

ほうしゆ

あたいさんぜん

あ

とう

むじよう

ほうじゆ

「一つの宝珠の、価直三千なるもの有り」等、「無上の宝聚

もと

おの

え

しやかによらい

みな

わ

こ

は、求めざるに自ずから得たり」、「釈迦如来「皆これ吾が子

とううんぬん

にちれん

ぎ

変

さち

さち

なり」等云々。日蓮あにこの義にかわるべきや。幸なり、幸

なり。めでたし、めでたし。またまた申すべく候。あな
かしこ、あなかしこ。

ぶんえいはちねんごがつ にち

文永八年五月 日

にちれん かおう
日蓮 花押

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

四条金吾殿女房御返事